

## Introduction

田口一成さんは現在、メディアから引っ張りだこの人である。SDGs（持続可能な開発目標）への社会の関心が高まる中、「社会問題をビジネスで解決する」という先駆的取り組みで実績を上げてきたからだろう。

私はその存材に注目し始めたのは、2019年3月に「人を大切に作る経営学会」の「日本でいちばん大切にしたい会社大賞」特別賞を受賞したことだった。すべての事業がどのような社会問題を解決しているかを示す指標「ソーシャルインパクト」を公開するといった姿勢に共感した。しかも、社会問題の解決と利益を両立させるだけでも容易ではないはずなのに、次から次へと起業している。そのエネルギーとビジョンに迫った。

神原：「貧困問題を解決したい」という志を持ったのは、テレビでアフリカの飢餓問題を見たことがきっかけだったそうですね。

田口：映像にやられました。社会起業を目指す人の中には、いきなり現地に行くのではなく、ドキュメンタリー映像を見て衝撃を受けた方が少なくありません。僕は当時、大学に入った頃で、自分の人生をどう使おうかと模索していました。映像を見て、貧困問題の解決に自分の人生を使うのはありだな、と思ったんです。

神原：代表取締役副社長の鈴木雅剛氏との関係について教えてください。

田口：鈴木は共同創業者です。創業時から、僕が前に立って事業を立ち上げ、彼は事業を整えるという分担を決め、志を一つにしてやってきました。

神原：田口さんと鈴木さんの先日のオンライントークを聞きながら、「ソーシャルビジネスで世界を変える」という理念は図表のような内容だと解釈しました。

田口：ご指摘のとおりです。NPOのビジネスでも、企業のCSR（社会的責任）活動でもない、僕らは（僕らが定義する）ソーシャルビジネスしかやらない、と言っています。

神原：次々とその「ソーシャルビジネス」を生んでいます。苦勞を聞かせてください。

田口：どんな事業も最初はうまくいかないものだから、特別な苦勞はありません。外国の留学生が入居できるシェアハウスのボーダレスハウス（同社初のソーシャルビジネス）の立ち上げの際には、銀行がお金を貸してくれないので、親族ら関係先を必死で回りましたが、こういうことも起業する時にはよくあることです。ただ、ミャンマーの山奥の農村でハーブ栽培を立ち上げるときは大変でした。どのハーブが育つかなど現地での調査に1年かかりました。ドライハーブの加工の仕方でも試行錯誤で、ハーブにカビが生えてしまうという失敗もありました。

## 社会起業家を支える「恩送りシステム」

神原：創業当初は田口さんらが起業されていましたが、途中から社員の起業を支援するようになりました。2017年から、事業は別会社で行う持ち株会社に移行しています。本体のボーダレス・ジャパンはどのような会社を目指しているのですか。

### 「ソーシャルビジネスで世界を変える」とは

○ビジネスは人間の不満、不便を解決しているが、そのシステムは「効率性」を優先して「人間」を置き去りにしているなどの結果、社会問題（貧困、差別・偏見、環境破壊など）を引き起こしている。社会問題は公共や非営利団体が取り組んできたが、継続性などの面で限界もある。

○継続性があるビジネスのシステムに「非効率」として置き去りにされてきた「人間」を組み込むことなどにより、社会問題を解決する「ソーシャルビジネス」に取り組む。社会問題の数＝社会起業家の数。社会起業家を増やして世界に広げていくことにより、従来の世界を変える。

立ち読み版  
Interview

田口一成さん

株式会社ボーダレス・ジャパン 代表取締役社長  
たぐち かずなり

ソーシャルビジネスで世界を変える  
まずは「社会起業家を1年で100人創出」へ

1980年福岡県生まれ。2003年早稲田大学商学部を卒業後、株式会社ミスミに入社、同期入社 of 鈴木雅剛氏（現・代表取締役副社長）と出会う。2007年、鈴木氏とボーダレス・ジャパン設立。2019年2月に日経ビジネス「世界を動かす日本人50」に選ばれ、2020年4月にテレビ東京「カンブリア宮殿」に出演。

【取材・文】 神原 哲也 日本記者クラブ会員。中小企業診断士。MBA。認定経営革新等支援機関。1982年早稲田大学法学部卒業後、日本経済新聞社に記者として入社。専門は経済、経営。日経各紙・テレビ東京・テレビ大阪などの報道部門、日経経営部門を経て2017年に独立。老舗企業・ファミリービジネスの「永続経営」、「人を大切に作る経営」やスタートアップの研究者。

【写真提供】 株式会社ボーダレス・ジャパン